

天文民俗学の課題—試論150の連載をめざして、さらに200の連載をめざして

北尾浩一

天界で天文民俗学試論を連載しているが、試論（150）に近づくにつれて、新たな課題と出会い、また、新たな展開をめざすことができるようになった。天界誌上では伝えることのできない天文民俗学の研究課題について総会の席で共に考えたい。

1. 試論（1）～（33）（『天界』1998年4月号～2000年12月号）

①試論のスタート

天文民俗学を体系的な学問として構築したかったが全く自信がなかった。しかし、私自身あまりにも力不足であるにもかかわらず、書きはじめた。人びとが星と暮らした20世紀が終わろうとしている1998年、何とかして21世紀へ星と暮らした人びとの言葉を伝えたいという思いから書きはじめた。内容について会員みなさまのお叱りとご批判を受けながら、21世紀に入った年、2001年12月に連載を完成し、1冊の小さな本としてまとめることができれば、という目標があった。

私自身は力不足でも、星と暮らした人びとの言葉の力はものすごい。星と暮らした人びとの言葉には、自然認識の力、生きる力、的確な判断力…と、私たちが失ってしまったすばらしいものがいっぱいある。だからこそ、星の伝承を、今では役に立たないもの、非科学的なものとして捉えるのではなく、あるいは、ふるさとのもの、ロマンを感じさせてくれるものとして捉える段階にとどまるのではなく、21世紀、人間の生き方を考えるときに大きな示唆となるものとして捉えていきたくかった。

まず最初に、「星が創る時間」という課題を設定した。もともと、人間の暮らしは、自然への依存度が高かった。人間は大自然を学びながら成長していった。そのなかに、星ぼしの輝き、動きがあった。特に、茨城県北茨城市大津町の山形さんの言葉を使わせていただいた。サンボシ（オリオン座三つ星）とムヅラ（プレアデス星団）になぜ注目して名前をつけて時間を知るようになったかについて、山形さんの言葉である。

「ただ、少し格好がちがってるだけで。みな星はひとつずつこうなってるのが3つそろってね、また、そばにも小さな光で3つそろっている。こういう星はねえわけなんだね。ムヅラいうのも、ひとところにごじゃごじゃと、こう6つばかりかたまってる。それもねえわけなんだね。そういうねえものを名前つけて時刻をはかったりしたんだね」

私自身、学校に行ったら時計台があって、1時間目、2時間目と授業を受け、時計の時間のなかで大人になっていった。そのなかで、感じることのできない時間があった。3つそろってる星、6つばかりかたまってる星ぼしの創る「時計で失われてしまった豊かな時間」にあこがれていた。

②予定より早く『星と生きる』に

2001年12月に連載を完成させて1冊の小さな本にしようと考えていたが、2001年1月1日、21世紀最初の日に出版を目指すことに変更した。まだまだ修正したり、考察を発展させていかなければならない点がたくさんあることはわかっていたが、2001年1月1日発行にして、何とかして21世紀へ星の伝承を伝えたいという思いが高まってきた。そして、幸運にも試論（1）～（33）をもとに、2001年1月1日、『星と生きる 天文民俗学の試み』を出版することができた。

『星と生きる』の「おわりに」に書いた下記の一文は、2010年、試論（150）の原稿を書いているときも、全く変わっていない考え方である。

.....
「教科書は買ってもらったが学校へは行けなかった」「学校さ行きたくねば行かなくてもよし、行ってもよし」「学校がきらいでね、私は10歳から船行っちゃったんです」

このように語った人びとのことを思い出す。もし、学校で天文を習っていたら、天文学者になれたかもしれない。しかし、星とのかかわりの大きさは、星を生活環境とし生き、伝承を語り伝えた人びとも天文学者は同じではなからうか。そして、天文学者の研究論文も、星との暮らしのなかで創造された伝承も、どちらも宇宙に対する人間の最高の営みではなからうか。

ところが、天文学史のなかに各々の時代で最高の設備を用いて研究した人、時代の権力者の側から星を観察した人の名前は登場するものの、星を生活環境として生き、多様な星の文化を育んだ何十億、何百億の人びとのことはとすると忘れがちであった。だから、本書では、天文学史に天文学者の名前が登場するように、星の伝承を伝えてきたひとりひとりの名前を記録した。

.....
『星と生きる 天文民俗学の試み』発行 ウィンかものがわ、発売 かものがわ出版、2001年



2. 試論(34)～(51) (『天界』2001年1月号～2002年6月号)

①2001年、星名伝承がどれだけ調査できるかという課題を設定

試論を進めていくにしたがって、「21世紀にどれだけ星名伝承が伝えられているか」ということと、「生活環境としての星」に関心を持つようになってきた。2001年、下記の地域を調査し、試論を進めた。特に、11月は「しし座流星群大出現」を見た伝承者へのインタビューを行なった。

2001年4月：高知県幡多郡佐賀町佐賀

6月：宮崎県延岡市鯛名町、長崎県下県郡厳原町豆殿

8月：鹿児島県大島郡大和村今里

11月：千葉県銚子市外川

また、「シリウス」「プレアデス星団との出会い・別れ」「オリオン座三つ星との出会い」「星が追いかけるという伝承」について、生活環境という視点から試論を進めた。

②書名が、『星空を生活環境として』から『星の語り部』へ

これらをもとに、『星空を生活環境として 天文民俗学の課題』というタイトルで本を作ることにした。ところが、出版直前に21世紀に伝承を伝える「星の語り部」という点を強調したいという思いから、『星の語り部 天文民俗学の課題』に変更した。仕事が忙しい時期で、夜中寝ずに校正を進めた思い出の本である。

『星の語り部 天文民俗学の課題』発行 ウインかもがわ、発売 かもがわ出版、2002年



3. 試論(52)～(71) (『天界』2002年7月号～2004年2月号)

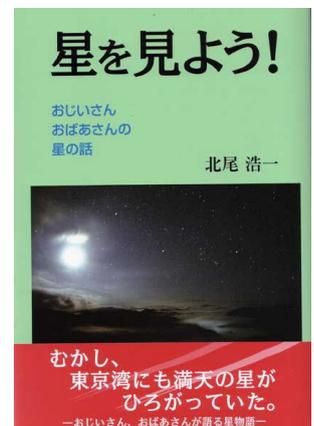
①研究よりも普及へ

昔は、暮らしのあるところ、すべてに星とのかかわりがあった。星が見えなくなってしまった東京においても星と人との様々なかかわりがくりひろげられていた。星名伝承を記録し試論を進めるだけでなく、星名伝承をもとに星空案内をしよう！ そのような思いが強まっていた。星名伝承の研究よりも普及をめざすようになった。

②普及とともに星物語の多様性を広く伝えることをめざした『星を見よう！』

ひとつの星物語が本に書かれてしまうと、その物語が何か絶対的なもののように誤解されることがある。そして、本に書かれている話の内容と微妙にちがう様々な物語が伝えられていること、即ち、その内容の多様性が忘れられがちであった。本当は、星物語を語る人の数だけ豊かな星物語がある。今まで記録した北極星の物語もそうだった。星物語の多様性を広く伝えたかった。

『星を見よう！ おじいさん、おばあさんの星の話』ごま書房、2004年



4. 試論(78)～(86) (『天界』2004年9月号～2005年5月号)

①天文民俗学事典をめざすことによって出てきた課題

日本の星名伝承の話者は、急速な近代化、機械化のなかを生きぬいてきた人びとである。そのような時代に生きた人びとが伝えていた多様で豊かな星名伝承から、ほんとうに、私たちが知らなければならないことは何だろうか。天文民俗学を近代化されるまえの固定化された特定の時期のものではなく、時代とともに変化していく動的な人びとの体験や観察の記憶と捉えたかった。そして、天文民俗学の研究を通してこれから星と人とのかかわり、よい言葉が見つからないが、星とのつきあい方の新しい可能性を切り開きたかった。その課題は大きすぎていまだに達成できそうにない。その大きすぎる課題とともに、天文民俗学の事典をめざすという目標を設定した。そのなかで、「日本の星名・伝承の形成」という課題と出会った。

日本の星名・伝承の形成を、地理的条件から考えた時、日本の緯度は、もっとも北の北海道宗谷岬の北緯約45.5度、もっとも南の沖縄県波照間島の北緯約24度と、20度以上ちがう緯度の範囲の星空での共通点と相違点が見えてきた。

・共通点

- i) 方角を知るための目標として、北極星(こぐま座 α 星)を用いることができる。
- ii) 時刻や季節を知るための目標として、順にのぼっていくプレアデス星団、ヒアデス星団、オリオン座三つ星、シリウスを用いることができる。

・相違点

- i) 東北南部を境界として、カノーパスを見ることが可能な地域と不可能な地域に分かれる。
- ii) 北極星の高度が20度以上もちがう。最北端の高度は、最南端の倍近くになる。
- iii) 北は、北斗七星さらにはカペラが周極星になる一方で、南は北斗七星の全ての星が周極星とならずに地平線下に没する。

また、時代をさかのぼると、歳差の影響を受けるが、西暦1600年の場合について、その影響は以下のように考えた。

- i) 共通点については、大きく影響を受けない。1600年になると、こぐま座 α 星は現在の約3倍—約2.9度天の北極から離れるが、方角を知るための目標として用いることはできる。順にのぼっていくプレアデス星団、ヒアデス星団、オリオン座三つ星、シリウスの出の間隔はほとんど影響を受けず、時間を知るための目標として用いることができる。
- ii) 相違点のなかで、カノープスは、ほとんど影響を受けない。周極星になる南限は、時代をさかのぼると、カペラについては北へ、北斗七星については南へ移動する。

②星名の形成とその特徴

日本の星名・星座は、全天をくまなくカバーしているわけではなかった。次のように星名形成が集中する傾向があった。

①冬の星座に星名形成が集中する傾向

夏の明け方に星を目標にするケースが多かった。例えば、夏のイカ釣りの漁師は、プレアデス星団、ヒアデス星団、オリオン座三つ星、シリウスと順にのぼっていく星をめあてにした。その結果、必ずしも冬に目標にするのではないが、冬の星座に星名形成が集中した。

②他にない特徴のある配列に星名形成が集中する傾向

次のような他にない特徴のある配列が注目されて、星名形成が集中する傾向があった。

- ・オリオン座三つ星…三つほぼ同じ明るさの星がほぼ同じ間隔に見事にそろっている星は他にない。
- ・プレアデス星団…広大な空に小さくごじゃごじゃとかたまっている星は他にない。

③見やすい一等星に星名形成が集中しない傾向

日本の一等星の星名の種類は少なく、例えば、星空を見上げればすぐ目に入るリゲルやベテルギウスは、三つ星のように広範囲に多様な星名が形成されていない。豊富な星名が形成されているのは、一等星のなかで、もっとも見るのが困難なカノープスである。

③星名の形成過程

星名は、単にひとりの発想によってなされたのではない。まず、ひとりひとりの暮らしがあって、人と人との「語り」があって、その過程で星名として確立していった。人びとは、日々の暮らしのなかで、星を見ようと思わなくても星を見た。星だけを見るのではなく、星と海、山、森、さらには日々の暮らしと重ね合わせた。星・人・暮らしがしっかりと結びつけられていた。星名は、星を見て、その特徴を認識する過程、日々の暮らしと星を重ね合わす過程等において形成された。そして、ひとりひとりが星を観察し、世代をこえ、地域をこえて、語り伝えるという過程において、星名は多様化していった。

「特徴を認識する過程において形成された星名」と「暮らしと星空を重ね合わせる過程において形成された星名」という2つに分けて日本の星名を考えるという課題と出会った。

④学術叢書『天文民俗学序説』に

事情で、『天文民俗学事典』として出版するのは延期した。『天文民俗学序説』として、日本民俗学会発行『日本民俗学』に掲載された拙稿とともに出版することになった。学術叢書に入ったこと、民俗学の分野に分類されたことが大きな刺激にもなり、また、大きな課題にもなった。

『天文民俗学序説 一星・人・暮らし』発行 学術出版会、発売 日本図書センター、2006年



5. 試論(87)～(92)、(94)～(100) (『天界』2005年6月号～11月号、2006年1月号～7月号)

①鹿児島県について事典をめざす

試論を88回で終了しようと考えたこともあった。実際、88回の終了を相談したこともあった。しかし、試論で取り上げたい課題、まだまだ書かなければならないことがあった。この時期、試論をずっと200でも300でも、仮に90歳まで500回を超えても続けたいと考えるようになった。

天文民俗学の事典のために必要な作業を行なううちに鹿児島県について、事典を作りたいという思いが強くなってきた。鹿児島県は、日本の星名を考えるにあたって、重要な位置であり、調査研究にあたって真っ先に押さえておきたい地域であった。勤務の関係でなかなか休みが取れなかったが、夜行バス等を活用して調査を重ねた。

②『ふるさと星事典』に

試論を500回でも…と、とんでもないことを考えるから罰があたったのだろうか。2006年9月入院、そして手術に。計3回の入院生活を通して、試論をそんなに長く続けられないかもし



れない、という現実につかかった。腎臓癌だった。本作りは、大幅に遅れた。2008年3月、再発で入院中、校正を行なった。そして、トカラ日食を前に、福澄孝博氏と共著で、南日本新聞開発センターから出版することができた。

『ふるさと星事典 一星とあそぼうー』南日本新聞開発センター、2008年

6. 試論(101)～(109) (『天界』2006年8月号～2007年4月号)

試論をスタートした頃は、あまり本の出版を意識していなかった。しかし、(100)を過ぎて、明確に本の出版を意識するようになった。特に闘病生活を通して、そんなに時間がないという現実と直面した。オリオン座の日本の星座名の形成という課題を設定し、事典のもとになることをめざして試論を進めることにした。

オリオン座＝日本の星座ではなく、オリオン座の様々な部分が日本の星座となった。「恒星名が限定された地域のみ」の分布であること」「盾の部分及び全景の星名座名」「全天の3つ並んだ星のなかでのオリオンの特徴」等、試論を進めていた。

7. 試論(110)～(138) (『天界』2007年5月号～2009年10月(9A)号)

試論(109)でオリオン座の連載をストップすることにした。研究は入院してもできる。しかし、フィールド調査はそうはいかない。まずは歩きたい、と、夢中で星名伝承を訪ねて歩いた記録を試論に掲載した。また、歩けることが自信にもつながった。

8. 試論(139)～(145) (『天界』2009年10・11月号(11月)～2010年5月号)

歩きながらも、やはり事典を出版しなければならない、と、事典のもとになるオリオン座の星名形成という課題に再び取り組むことにした。生活の様々な場面と重ね合わせて形成された星名やカラスキ、小三つ星等について、試論を進めた。

9. 試論(146)～(150) (『天界』2010年6月号～)

試論でカノーパスは何度か取り上げたが、まだまだ取り組まなければならない課題があった。「漁村地区以外のカノーパスの星名伝承」「カノーパスの星名の北限」「千葉県のメラボシ」等、ひとつずつ課題に取り組んだ。

10. 試論(151)～

常に、星と暮らした現場から日本の星名形成という課題に取り組むことによって、新しい展開をめざしていきたい。

カノーパス、プレアデス星団、北斗七星、北極星、明けの明星、宵の明星の日本の星名について試論を進めるとともに、21世紀になってはじめて記録できた以下の星名についても、検討を重ねていきたい。

2005年：ダイヤメボシ(鹿児島県枕崎市、晩酌の星)

2009年：ホクサンボシ(新潟県佐渡市)

2010年：ジョウロ(静岡県伊東市)

11. 新たな課題

自分の調査記録をまとめること、多くの調査記録のなかで自分の調査記録を見つめ直し、天文民俗学の構築を進め、星名伝承を学校教育・社会教育(プラネタリウム等)現場で活用していただくために役立つ事典をつくること、もっともっと大きな課題で、私にとって時間切れになりそうなのが、海外の星名伝承の記録と天文人類学の構築。生活のなかで語られた星名伝承と、ひとりひとり生活経験に人間として大切な感性、能力を見出し、次の世代へ引き継ぐこと、それらへの歩みが、これからも、天文民俗学試論で一歩一歩でよいからできれば、と願う。

(2010年8月28日、星の伝承研究室にて)